

與つて力なくんばあらず。余は益、山陽を偉とせざるを得ざる也。益、日本樂府の六十六篇を愛誦せざるを得ざる也。

新譯日本政記の序

京都の東山、將軍塚の下、長樂寺の上、近く丸山公園を見下し、遠く舊皇城を望むの處、賴氏の墓域ありて、山陽翁の毅魄長へに眠る。嗚呼、翁は如何にして死にしか。翁の門人江木哉は、『行狀』に記して曰く、『秋に及んで疾益劇し。母夫人の之を憂ふるを慮り、家人を戒めて告ぐる勿らしめ、唯報ずるに、微恙尋いて癒ゆべきを以てし、往復の書牘、勉強して筆を執ること平常の如し。始めて病みしより、酒を禁じて飲まず。而して客至れば、爲に筵を設け、談笑自若たり。病既に急なるや曰く、我が死方に逼れりと。然れども猶眼鏡を著け、政記を手にして刪潤して止まず。忽ち左右を顧みて曰

く、且らく靜にせよ、我れ將に假眠せむとすと。乃ち筆を擱き、眼鏡を脱せずして瞑す。就いて之を撫すれば則ち已に逝けり』と。凛烈なる哉賴翁の終焉、千載の下、なほ懦夫をして起たしむるに足る。死期逼りてもなほ著述を廢せず、好きな酒すら禁じて、日本政記を完了せり。嗚呼賴翁は日本政記を以て死したる也。

翁の病は肺病也。其死に先だつこと凡そ七十日、即ち天保三年六月十二日に血を咯けり。江木哉は、その時の事を記して曰く、『忽ち咳嗽を發して血を咯く。醫曰く、これ積年神を勞するの致す所、所謂肺血疾也。治すべからず。先生は豪傑、死を怖れず。故に敢て實を以て告ぐと。一醫曰く、猶療すべしと。先生曰く、死生命あり。然れども我れ上に老母あり。且つ志業未だ成らず。たとひ一生理なきも、宜しく醫療を加ふべし。我れ慎んで服藥し、傍ら死計を爲さむのみと。時方に日本政記を著す。乃ち日夜勉強して稿を構ふ。曰

く、我れ必ず之を成して地に入らん』と。偉丈夫と云はざるべけんや。山陽の政記か、政記の山陽か。山陽翁一生の心血凝りて、一部の日本政記となりける也。

頼翁は先に日本外史を著せり。されど、外史のみを以て満足せず。外史は武門の歴史也。翁は更に進んで朝廷の歴史を編めり。日本政記即ち是れ也。頼山陽を知らむには、日本外史を讀まざるべからず。外史を讀みたる者は、進んで日本政記を讀まざるべからず。古人曰く、鳥の將に死なむとするや、其聲悲し。人の將に死なむとするや、其言善しと。況や一部十六卷の大著述なるに於てをや。

頼山陽翁は學者也、文人也、詩人也、歴史家也、書家也、畫家也、批評家也。然れども普通の學者、文人、詩人、歴史家、書家、畫家、批評家に非ざる也。吾人の翁を偉とするは、其崇高なる人格に在り。其崇高なる人格を以て尊王愛國の精神を發揮したるに在り。日本外

史これ也。日本樂府これ也。日本政記これ也。即ち尊王愛國の精神を發揮する事は、頼翁が一生の根本的事業也。政記は筆を神武天皇に起して後陽成天皇に止む。その筆を後陽成天皇に止めしは、山陽の病死せしが爲に非ず。始よりの計畫なりと思はる。翁は徳川幕府の盛時に在りて、いたく皇室の式微を慨けり。然るに、徳川氏執政時代のことを記して、幕府を罵倒しては、其書が世に行はるべくもあらず。さればとて、其書が世に行はるゝを欲するが爲に筆を曲ぐるは、翁の忍ぶ能はざる所也。故にわざと紀事を秀吉の終焉に止めて、一切、徳川幕府創立以後に及ばざりしは、尊王愛國の精神を有するものとして、必ず然らざるを得ざる所也。政記は朝廷の歴史なるが、なほ精しく言へば、朝廷の政治の歴史也。即ち政治史也。而して政記の一半は紀事にして、一半は論文也。翁は重きを論文に置けり。其病甚しきに及びて、政記の完成を急ぎ、息の絶ゆるまでも

手づから刪潤して止まざりしは、論文也。紀事の方は、止むを得ず門人の手を假りたり。政記を讀まじものは、翁の意の在る所を諒として、殊に論文を熟讀せざるべからず。さらば紀事は讀むに足らざるかと云ふに、否、紀事とても、全く始より門人に一任したるには非ず。朝政に關することを主として、選擇其宜しきを得たり。即ち政記は政治論を經とし、朝政の事實を緯としたるものにて、其體裁が既に異彩を放てり。上古の王政は如何に美しかりしか、王政は如何にして衰微せしか、衰微せる王政を如何にして回復すべきかなどの問題は、一篇を通じて頼翁の力を注げる所也。國體の淵源を説き風教を説き、富國強兵の法を説くなど、いづれも頼翁が尊王愛國の精神の發露にあらざるは無し。殊に先王が御心を民治に用ゐ給ひしことは、翁の特筆大書せる所なるが、これ社會政策の急務なるを感じつゝある今の爲政者の、大に參考せざるべからざる所也。

さき頃、南北朝正閏論が大に世を騒がしたるが、余輩は斯る論が世に起らむとは、夢にも思はざりき。何となれば、南朝の正統たることは、先に水戸義公、大日本史を著して之を明にし、後に山陽翁出で、政記を著して更に大に之を明にし、殊に頼翁の外史や政記は一般に廣く讀まれて、天下の志士を感化し、其感化の及ぶ所、維新の一大原動力ともなりて、國論既に一定し居りたれば也。今斯る論の起りたるは、畢竟するに、曲學阿世の徒ありて、妄に私説を立つるに急にして、利と勢とに就きて恥ぢざるに由る。而して其影響する所は大に寒心せざるを得ず。嗚呼頼翁が心血の凝れる日本政記は益ひろく世に讀まれざるべからざる也。それに就きて、余輩は江木戩の、『行狀』に據りて翁の逸事を傳へざるを得ず。『行狀』に曰く、『其病むや、猪飼敬所翁來り訪ふ。談、南北朝正統の事に及ぶ。議大に合はず。戩時に病に侍せり。翁既に去る。先生曰く、苟も北朝を以

て正統となさば、豈に新田楠諸公を以て亂臣賊子となすかと。之を言ふの時に方り、目張り、眉軒り、其慷慨激烈、病むと雖も衰へざる也。遂に更に正統論を著して之を政記中の初論の後に置けり」と。嗚呼頼翁は死に至るまでも皇室を念うて止まざりし也。政記は、斯る偉大なる人の斯る偉大なる精神より發したるものなるが、惜むらくは、天公は翁を白玉樓に招くこと急なりき。翁はなほ多く文句を修正したかりしならむ。門人の補助を不満足に思ひしならむ。今世に行はるゝ日本政記は、翁の歿後に刊行せられたるものなるが、誤謬舛錯多く、意味の通ぜざる箇所も少からず。凡そ世上の木版本にて、政記ほど校訂の粗漏なる悪本は他に其類稀なりと思はるゝばかり也。これ翁の爲めに惜しむべき也。校訂は斯ばかり粗漏なれども、政記其物は傑作なれば、從來大に世に行はれたり。大に行はるれば註解の書が出づべき筈なれども、漢學者は國史に暗く

國學者は漢文に通ぜず。政記の論文だけは、註解の書あれども、紀事の註解は一も之なく、さらでだに漢文を讀む力の減じゆく今の讀書界に、政記は益讀者と遠ざからむとす。これ余が日本政記を譯する所以の微意なり。難解の語は成るべく解釋したり。即ち書中括弧を用ゐたるものこれ也。誤謬と思はるゝ處は、僭越の罪を顧みず、六國史、大日本史など、出處の原本と思はるゝものに就きて、一々之を正したり。庶幾くは大瑕なきを得むか。然れどもわれ淺學寡聞訂正を誤れることなきを保せず。解釋を誤れることなきを保せず。又官名人地名などの訓み方を誤れることなきを保せず。大方の君子、願はくは高教を垂れられよ。嘗に余の幸甚しきのみならず、頼翁も亦地下に首肯せんかと思はるゝ也。書中諸處に加へたる批評の如きは、固よりこれ蛇足、讀者諸君、讀むも可也、讀まざるも亦可也。

新譯日本外史序

人生忘られぬは故郷也。少年郷を出て、老大にして歸らんか、よしや相逢ふの人は生面なりとも、某の山は兎狩せし處、某の水は香魚釣りし處などと、萬感自ら胸にあつまるべし。日本外史は余が十四五歳の頃愛讀せし書也。今、幾んど三十年をへだてて之を讀むに、げに老大にして故郷にかへる時の感慨も斯くやと思はる也。思ふに、日本人の書きたる漢文の書にして、日本外史ばかり長き年月にかけて多くの人に讀まれたる書物は他にあらざるべし。如何なれば斯く日本外史が愛讀せらるると云ふに、その著者頼山陽の人物、識見、趣味、筆致が、日本男子の意見と相投合すれば也。山陽は近世の偉人として世に知らる。今より凡そ百年前、徳川の全盛を極め、従つて天下太平の極に達したる文化文政の頃に、在野の學

者として京都に住みたる人也。詩文書畫いづれも一家を成したり。殊に最も文に長じたり。當時の漢學者は、支那の事のみを知りて、却つて我國の事に暗きもの多かりしが、山陽は漢學者ながらも、國史を研究したり。その史眼と才筆とが相合して、茲に日本外史となれり。更に日本政記となれり。外史は筆を源平に起して、徳川氏に至りて、其稿を終へたり。政記は筆を國史の冒頭より起して、後陽成天皇に止む。なほ他に通議、詩鈔、遺稿、日本樂府等の著あり。不朽の文毫也。

思ふに、山陽は才子也。されど、翩々たる輕薄才子には非ず。氣骨のある才子也。故にその詩にも、文にも、毫も浮華輕佻の態なし。血もあれば、涙もあり。言言人を刺し、句句人を動かす。その趣味は、治亂興廢より山水美術にわたる。觀察殊に奇警也。同情の凝る所、一山を記すれば、其山がその儘にあらはれ、一水を記すれば、

其水がその儘にあらはる。以て他に移すべからず。徒に文辭の美を弄する文人者流とは其選を異にす。之を史傳に移して、英雄を描けば、英雄生動し、美人を描けば、美人生動す。雄壯なるべくして雄壯、哀婉なるべくして哀婉、熱血筆端に溢れて、文章人物と共に生動す。敘事の妙、入神の概あり。詩にありて咏史、文にありて史傳これ山陽の獨舞臺也。

殊に山陽に取るべきは、其識見に在り。當時の學者は概して章句の奴、もしくは弄文の徒なりしが、山陽は大義を解したり。徳川の全盛時代に勤王の精神を鼓吹したり。其子三樹三郎が義に死したるも、蓋し家庭の遺訓也。日本外史が幕末の志士の氣を勵ましたるのと如何ばかりぞや。史傳の書も太だ多きが、外史ひとり飛びはなれて、もてはやされしは、山陽の人格より出てたる筆致が、實に人を動かすものあれば也。單に正しき事實を傳ふることは、普通の史家

之を能くす。史傳を活かして目前にあらはすことは、山陽の如き偉人の才筆を待たざるべからず。實に人物を活躍さするの史書として即ち血の通へる歴史として、日本外史の如きは、他に其比を見ず。其最もよく愛讀せられたるも、成程と思はるる也。日本外史は武門の歴史也。されど單に事實を傳へむとするに非ず。歴史家より見れば、或は非難あるべし。されど、人物を活躍させて、史傳を讀者の胸中に生かすの妙手腕に至りては、冷かなる史家といへども、之を認めざるを得ざるべし。日本外史は、實に無類獨得の散文の敘事詩也。之を讀まざるものは、或る意味に於て、不幸なる國民也。

今日とても、日本外史はなほ世に行はる。されど、漢文の教育衰へて、國民一般に漢文を讀むの力が乏しくなり、日本外史の如き傑作も、空しく之を高閣に束ぬるに至らむとす。これひとり日本外史のみならず、他の漢文の名著みな然り。われ之を慨して、曾て新坂

の説をつくりぬ。その要に曰く、東京の愛宕山には、非常に急なる男坂あり。やや緩なる女坂あり。先年人力車をも通ずるまでに緩なる新坂が出来たり。斯くて上り易くなりたり。之が爲に愛宕山に上る者が、増したることはあるも、決して減ぜざるなり。元來、書物は思想を盛り上げたる山也。徒に文字を臚列するものに非ず。學者に在りては、難文字が、一向むつかしからず。然るに一般の讀者は先づ文字の難關に苦しみて、折角上りかけたる山へも上らずに終るもの多し。愛宕山に新坂を開きしが如く、難讀の書は、讀みややすくする方法を講ぜざるべからず。維新以前にありては、學問と云へば、漢學なりき。漢文は、第二の國文なりき。今、學問するには、普通學を修めざるべからず。國文、なほ溯りて古典をも讀まざるべからず。漢籍をも讀まざるべからず。洋書をも讀まざるべからず。當年の學生と今の學生との漢學の讀書力は、到底比較にはならず。

漢文は、最早第二の國文に非ず。今の學生の讀書力に取りては、洋文が女坂にして、漢文が男坂也。あたら幾萬部の梵漢の名著も、空しく紙魚の腹に葬られむとす。今後、一般の漢文の讀書力は、いよいよ下るとも、上るべき見込はなし。世上の識者、今に於て蹶起せよ。蹶起して佛典を翻譯せよ。漢籍を翻譯せよ。佛典、漢籍に新坂を開くことは、方今讀書界の最大急務也。佛典、漢籍の新坂とは、平易なる國文に翻譯することなりと。

われこの説を持すること久し。終に謗劣を顧みず、茲に先づ之を日本外史に試みたり。即ち日本外史に新坂を開きたる也。成るべく原文の語勢を失はぬやうにし、解し難しと思はるる字には、括弧を入れて、之が解釋を付したり。なほ處々に批評をも加へたり。批評とは云ふものの、前賢の傑作に向つて、必ずしもかれこれ悪口言はむとする野心あるては無し。花もひとり眺めては、面白からず。山

水も人と同じく眺めて、かれこれ話しあひてこそ、旅行の味が一層加はるものなれ。外史は云は、余が精神上の故郷也。曾遊の山水也。茲に少年初學の士に向つて、先達の氣になりて、あの山はどの、この水はどののと、案内ともつかぬ感想をのべたるだけの事也。固より無くてもよけれど、あれば有るて、いくらか、讀書の旅の餘興にもやと思はる。人各見る所あり。我は我だけの感想を云ふ也。もとより佛頭糞を塗るの譏は、敢て辭せざる所也。

文藻三百題終

明治四十四年七月七日印刷
 明治四十四年七月十日發行

著者 大町桂月

發行者 加島虎吉
東京市日本橋區本石町三丁目十四番地

印刷者 佐久間衡治
東京市京橋區四紺屋町二十七番地

文藻三百題
 不許複製
 定價金六十錢

印刷所 株式會社英秀舍

發兌

東京市日本橋區本石町三丁目
電話本局三六六番二一六七番
 振替附金口座東京一七四四番
 至誠堂書店

東京市日本橋區住吉町二番地
電話浪花五八四九番
 振替口座東京一九八四二番
 至誠堂小賣部

大町桂月先生新訂

學生文庫

袖珍總口スー舶來紙印刷鮮明特製美本
全部壹百冊定價各冊參拾錢郵稅各金四錢

第一編 南朝史傳 全
南朝正統の史料を網羅し盡す
青年處世の心得を説いて懇切を極む

第二編 日本外史 上
訓點詳密印刷鮮明本文六號拾假字
八號蓋出版界空前之舉

第四編 謠曲全集 上
斯道の泰平丸岡桂先生參訂悉く誤謬を且細註を施す

發刊の趣旨

書籍は精神上の食物なり人間一日も肉體上の食物を廢すべからざるが如く亦一日も精神上の食物なかる可からず殊に古典的知識は人の學徳智能を深奥ならしむる者なりされど濫讀の害あるは猶流食の害あるが如し近時古書翻刻の續出する汗牛充棟も畜ならざるに際して大町桂月先生深く慨する所あり蹴起して茲に「學生文庫」を編せらる一々嚴密なる選擇の下に今の學生の必ず讀むべく讀みて大に裨益あり且尤も趣味深き先哲の良書を採擇し校訂を精確にし一々先生獨特の達筆を以て周到なる解題を附し併し印刷は鮮明裝幀は優良製本は堅牢價格は低廉にして今の暇々止まざる二十世紀讀書界の希望に副はんとす眞に是れ精神上の絶好食物校訂書中の一大異彩天下の學生諸君の机上豈此書なくして可ならんや

近刊書目

源平盛衰記 上
大平記 上
平家物語 上
先哲叢談 全
心學道話 全
狂言記 全
以下續々著手

帝國大學教授法學博士
和田垣謙三先生著
○青年諸君
(增訂改版) 四六判特製

定價 金一圓八角

世評一斑
國民新聞曰く著者の滑稽と妙文とは世の知る所... 口を銜いて出る滑稽の圓轉滑脱と智識の該博にして論旨の意表に出る處殆ど敵手無し奇書の一と云ふに憚らず▲中外英字新聞曰く... 樂天家にも厭世家にも均しく好伴侶として歡迎せらるべきを信ず思想の豊富なる活氣の横溢せるとに於て博士の文は確かに當代に冠絶す

帝國大學教授法學博士
和田垣謙三先生著
○世界商業史要
菊列總クローヌ特製

定價 金一圓二角

本書は太古以來三千年に亘れる世界商業の盛衰を叙し最近英米獨の諸邦編を太平洋上に争ふの壯觀に及ぶ惟ふに商業史は一面に於て文明史也政治史也古今列國興亡の跡を訪れ世界通商の發達を叙するに於て博引旁證叙事明快本書は博士が獨壇の勝場を示して餘蘊なし
本書は公私商業學校學生の好參考書たるのみならず苟くも世界の大事に通せんと思ふ者に取れば必携必讀の書なり

皇孫殿下上覽の光榮を賜ふ
和田垣博士中谷無涯兩先生著
○成中奉體歌
東京音學會作曲
訂正八版

定價 金五錢

此唱歌は成中詔書の聖旨を奉體して分り易く曲面白く小學生徒の方々の諷誦に供せんとするもの、朝な夕なに口吟まれば、長き御心の程推し奉られて限りなき聖徳に浴するの思あるべし萬民必讀の國民的唱歌として江湖の諸賢に薦む

部數取纏め御注文の節は割引可仕候

和川垣博士戲著
川村密伯紳誌
○處世餅
袖珍美本

定價 金五錢

腹ふくらす所の所謂餅の餅にあらずる(モチ)の種類各種を(長持)にも納め切れぬ程澤山(モチ)出したる處先づ讀者の度胸を抜くそれより人生最大の要點なる氣持心持を論じ心は不可思議なるものとこの題下に此驚妙不可思議なる心の作用を説く小冊子ながら滑稽諧謔の裡に含蓄する眞理教訓は他の萬巻の修身訓話に優る

東京替振
四四七一

店書堂誠至

區橋本日市京東
目丁三町石本

兌發

東京替振
四四七一

店書堂誠至

區橋本日市京東
目丁三町石本

兌發

滿洲男爵閣下序
新渡戸博士序
川村橋伯
表裝裝讀
蘆川忠雄先生著
表裝裝讀
敬養
父の書簡 (版四)
菊版總クローヌ美裝

定價 金一圓
郵稅 金二角
總計 金一圓二角

目 次
第一信性の偉大なる勢力、第二常識の修養、第三日常談話の要
第十大第活第十第簡の認め方、第五筆蹟の疎放を誠む、第六金錢の使用
第十五大第全第十三外活の効理、第八世態人情の機微、第九眞實の道
第十六大第活一活八人生第十四眞實の道、第十二代休養

蘆川忠雄先生補譯 (版四)
なかれ
規 規
交際
袖珍美本
ダイヤモンド

定價 金五圓
郵稅 金四角
總計 金五圓四角

「なかれ」は日常交際の要訣に就て簡潔明快の洗練的文章を以て記述
「なかれ」は日常交際の要訣に就て簡潔明快の洗練的文章を以て記述
「なかれ」は日常交際の要訣に就て簡潔明快の洗練的文章を以て記述

蘆川忠雄先生著(四版)
交際と應對
菊版上製 全一冊

定價 金五圓
郵稅 金六角
總計 金五圓六角

本書は著者獨特の人物養成論也修養を積むて忘らずんば何人も有爲の人
或は其欠陥とせる所に突進して之を教示し精神的飢渴を満たさしめ其
の氣満ち一讀痛快淋漓の感に堪へず苟も處世修養と人物の大成に志あ
る青年諸君は本書に就て斬新有益の智識を享受せられよ

蘆川忠雄先生著(再版)
談話術修養
菊版特製 全一冊

定價 金五圓
郵稅 金六角
總計 金五圓六角

本書は著者獨特の人物養成論也修養を積むて忘らずんば何人も有爲の人
或は其欠陥とせる所に突進して之を教示し精神的飢渴を満たさしめ其
の氣満ち一讀痛快淋漓の感に堪へず苟も處世修養と人物の大成に志あ
る青年諸君は本書に就て斬新有益の智識を享受せられよ

蘆川忠雄先生著 (再版)
修養と人物
菊版特製 全一冊

定價 金五圓
郵稅 金六角
總計 金五圓六角

是れ著者獨特の人物養成論也修養を積むて忘らずんば何人も有爲の人
或は其欠陥とせる所に突進して之を教示し精神的飢渴を満たさしめ其
の氣満ち一讀痛快淋漓の感に堪へず苟も處世修養と人物の大成に志あ
る青年諸君は本書に就て斬新有益の智識を享受せられよ

蘆川忠雄先生著
勤儉の實踐
菊判 全一冊

定價 金五圓
郵稅 金六角
總計 金五圓六角

著者獨特の人物養成論也修養を積むて忘らずんば何人も有爲の人
或は其欠陥とせる所に突進して之を教示し精神的飢渴を満たさしめ其
の氣満ち一讀痛快淋漓の感に堪へず苟も處世修養と人物の大成に志あ
る青年諸君は本書に就て斬新有益の智識を享受せられよ

蘆川忠雄先生著
時間の經濟
菊判 全一冊

定價 金五圓
郵稅 金六角
總計 金五圓六角

文明の進歩と社會の發達に從ひ生存競争は益々激甚となり其生存競争
の最大根柢となるは時間と金錢との二者也其重人金錢なるに至りては
文明の進歩と社會の發達に從ひ生存競争は益々激甚となり其生存競争
の最大根柢となるは時間と金錢との二者也其重人金錢なるに至りては

公露山縣有朋閣下題字
伯露東久世通閣下序
牛門隱士中川克一先生著
天山陽外史
(三版)

定價 金五圓
郵稅 金六角
總計 金五圓六角

家てなは價筆陽頼山陽の勤王の權化にして日本外史は對幕の機文なり然るに世往々
家てなは價筆陽頼山陽の勤王の權化にして日本外史は對幕の機文なり然るに世往々
家てなは價筆陽頼山陽の勤王の權化にして日本外史は對幕の機文なり然るに世往々

京東替振 店書堂誠至 區橋本市京東 兌發
四四七一 目丁三町石本

乃木將軍手簡 訂正五版
牛門隱士著 四六版全一冊

○近偉人百話
四六版全一冊

大町桂月先生批評(再版)
四十名士の四十七士觀
四六版 全一冊

德富蘇峰先生手簡
今井鐵嶺先生編
○卅六新時代の修養
四六版 全一冊

梅雪山山人新著 (三版)
川村畫伯表裝
○修養座右錄
袖珍美本

村上浪六先生序(最新刊)
○小運 命
中村白鳳先生著

山田美妙先生著
川村畫伯表裝
○諷刺 ふたり女
四六判 全一冊

瀬戸半眠先生著(再版)
○珍々間語
四六判 全一冊

文學士草野柴二先生譯
○モリエール全集
瀧谷國四郎外十五畫家挿畫

定價 五錢 郵税 六錢

世評一斑
報知新聞評 英雄崇拜を以て青年を奮勵し他日の器を成さしむるの要は世に志す者の等しく認むる所なり本書は著者老熟の文筆の筆致を以て近代偉人の百話を寫せしもの蓋し青年の讀すべき良書なり
二六新聞評 四郷南洲、大久保、木戸、伊藤等の維新の元勳より乃木桂に至る百餘名の逸話を載す文章簡潔にして毫も冗漫の痕なく取材亦正確にして趣味津津たり、青年の好讀物たるべし

定價 五錢 郵税 六錢

當代四十七名士が當年の四十七士に就いて感想を陳べたること既に文壇の奇觀なり大町桂月先生が其感想に向つて一々批評を下すに至りて奇愈々奇なり眼孔銳利筆勢奔放言々至誠に發して秋毫も枉ぐる所なく感歎諷刺熱罵冷笑交もく出で、大發益々明かに四十七士の忠烈益々輝く四十七士に關する著述として實に空前絶後何人も一讀して快哉を叫ばざるを得ざらむ

定價 五錢 郵税 六錢

本書の著述者
大隈伯渡邊子加藤男牧野男尾崎行雄河野廣中元良
博士山岡中佐林伯濤澤野重野博士松岡毅目賀田
男宮部久松村介石德富蘇峰櫻井博士澤柳政太郎高
橋博士山路愛山鎌田榮吉梅博士高瀬博士佐藤少將
一江原素六古賀康三林田輪長三宅博士水野參事官
大發註

定價 六錢 郵税 六錢

從來發刊せし修養の多くは千篇一律にして舊套を模倣せるに過ぎず隨て今日の生存競争時代に應用する能はず獨り本書は此種の著書中にて斬新に尤も奇抜の見地より現代青年の必須なる日常處世の心得大體周到の態度經濟的觀念等哲人の大達觀より痛快の斷案を下したるものにして卷末には名家座右訓を付したる等用意周密一讀意氣伸暢無限の新智識と貴重なる處世訓を學び得らるゝもの天下に其比なかるべし

定價 八錢 郵税 八錢

智能ある者必ずしも幸運ならず、智能なき者亦た必ずしも不運ならず學者も政治家も教育者も軍人も實業家も皆是れ人間たる以上到底運命の翻弄を免かれ難し、本書の主人公藤原輔也が才識卓抜の身を以て朝氣の爲めに頓挫を來せる物語。名は小説にして實は教育上の大議論。本書を讀まざる者は共に現代を語る可からず

定價 五錢 郵税 六錢

本書は先生が其天來の快筆を驅りて現今人情の裏面を描寫せるもの兄妹二人が各其配偶者を得んがため新聞紙上に求婚廣告を出せしに豈に測らんや其候補者は自分等兄妹ならんとは此の意外の會見に兩人喫驚して滑稽百出する筋にして一讀噴飯再讀哄笑連發頷を解くと共に無邪氣なる滑稽小説の中に無言の諷刺を受くる處多大ならん

定價 五錢 郵税 六錢

本書の内容
猿面冠者●暑中休暇●門涼●女子列任官●夏の日●笑はぬ人は●他の花●大器晩成●眞情●芳ちやん●斯親子●あつても●迷懷●温泉湯●尻笑ひ●鮎の一節●お灸●御殿●書を讀んで●御無心●ハッ當り●人の日●菩薩の欠伸●共様さ●笑はぬ人は●老の爲●さしむかひ●鬼一口●南無阿彌陀佛●ない讀め！●よい中●老車夫●大晦日●君が代●瀬戸際

定價 各各 郵税 各各

◎萬朝報批評 譯者草野柴二氏は大學文學科の出なるが復た獨佛語をも修めた眞摯な研究者である芝居好で殊に喜劇が好きだと云ふ道理で此の全書の中に面白く譯されてる對話の輕妙なのは感服する位ほどの大作を我文壇に移植して喜劇研究に好材を與へた作者の苦心と功勞とは深く謝さればならぬ

發兌 東京市日本橋區 至誠堂書店 振替 東京四七四 一七四

神戸高等商業學校校長
水島鐵也先生校閱

○新商業讀本

鈴木寛一君合著 全三册
道野信藏君

定價各金三十三錢

本書は斯業に尤も經驗深き岡先生の編輯に成り更に商業教育界の明星たる水島鐵也先生の校閱を経たるもの其内容の豊富にして歐米商業界の最新智識を巧みに採排し加ふるに著者獨特の明快雄健の筆を以て巧みに之れを敘述したり今や公私の學校にては陸續教科書に採用せらるるの榮を得たり然かも單に教科書のみならずして實務的訓練に志ある者は一本を座右に備へて日新の活智識を得られ

學習院
女學部長松本源太郎先生題字

○教訓お伽噺

中谷無涯先生著
四六判上製頗美本

定價各金五十六錢

讀めば讀む程面白く味へば味ふ程深い教訓のある本書は装釘の美と内容の美と相俟つて錦上に花を添ふるの觀あり女子はこれを讀んで健全なる趣味の發達を圖るべく教育家はこれに依つて修身訓話の材料を得べく獨り我が家に備ふべき讀物たるのみならず子弟のある家庭の進物として最上の良書なり

日本 濠澤男爵閣下序文

○勤儉の教訓

米國 カイネギ一翁近著
日本 山崎梅處先生譯

定價各金六拾八錢

米國富豪カイネギ一翁の名著「實業の帝國」及び「富の福音」二書既に久しく邦人の間に行はる、本書は右の二書以外最近同翁最も入念の著述として好評噴々たる處世上の教訓十數章を譯出せるもの勤儉主義の化身たる翁一家の處世法を味ふべし。先に戊申詔書出で、自強不息の教を宣らせ給ふ、本書の上梓亦唯一に聖旨に副い奉らんとするの徴志のみ、敢て大方君子の一榮を博せんとす

文學博士大西祝先生述

○西洋美學史

菊判特製 全一册

印刷中

我國最近各級の藝術隆盛に文運彬々たりと雖も而も之れが根柢たる美學の研究に至りては未だ幼稚にして其研究家も亦寥寥として又天の星の如く故大博士は斯界の明星たり學識深淵人格高尚にして又文藻に富む如く證より下現代に至る西洋美學の所と大綱を講述せられたるはなし本書は上は哲學該博四洋美學の沿革歴史と志あるの士速に一本を座右に備へ給へかじ

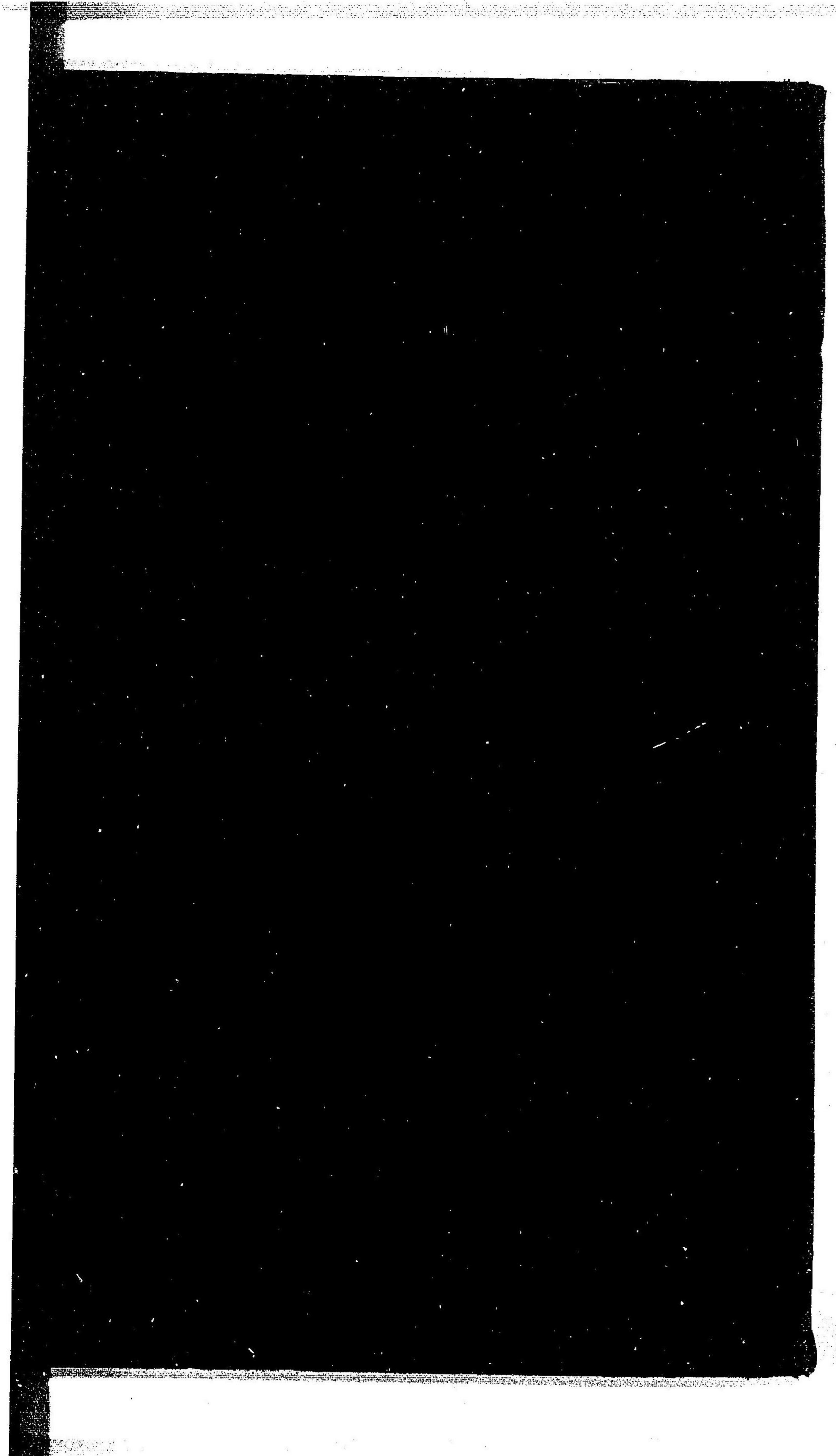
發兌

東京市日本橋區

至誠堂書店

東京市日本橋區

332
111
॥॥॥





079593-000-7

332-111

文藻三百題

大町 桂月/著

M44.7

DAC-3630

